

●修験道とは

われわれ山伏の行じている宗教、それが「修験道」です。「山伏とは何者か？」と尋ねられたら、「修験道の実践者である」ということになります。

修験道とは、山へ籠もって厳しい修行を行うことにより、悟りを得る宗教のことです。そして、修験道の実践者を修験者または山伏といいます。では、修験道とはいったいなんなのでしょうか。ここでは、四つの観点から説明しましょう。

・修験道の定義①山の宗教である

第一に、修験道とは「山の宗教」であるということです。山で修行をする宗教、山を道場とする宗教、山を拝む宗教、それが修験道です。とにかく山なくしては、修験道は成り立ちません。もっと言うと、山そのものが御神体であり経典です。これが修験道の一つの大きな特徴です。

そもそも修験道の生まれた背景としては、山の多い日本の風土があります。そして、日本人特有の宗教観にも由来します。古来、日本人は自然を崇拝し、とくに山に対する畏れの思いをいできてきました。山にはある種の霊的な力があると信じられてきました。その人智を超えたなにか力のある山にこもって修行する。山という大自然の中で身心を鍛えていく、智慧を磨いていく。そのなかで、悟りを得ていく。これが修験道が目指すところです。

今でも、私たち山伏は欠かせない修行として、毎夏、大峯奥駈【ルビ：おおみねおくがけ】という山奥を駆ける修行をします。だいたい一日十三時間ぐらい、雨が降ろうが槍が降ろうが、きめられた行程を黙々と歩む修行です。それは偉大な自然の中に入れていただく、ありがたくも山という御神体の中で修行させていただく、仏さまの体内で過ごさせていただく……そういう心がけで行う、悟りへの修行です。

・修験道の定義②実践的な宗教である

修験道とはなにかという第二のポイントは、修験道はつねに「実践的な宗教」であるということです。「実践的な宗教である」とはどういうことかという、まさに「わが身体をつかって行う修行である」ということです。五感をフルに目覚めさせて行うのが実践です。観念的なテキストを読んで信仰するような思想やイデオロギーではありません。

この修験道の実践性は、「山伏」という呼び名にわかりやすく表されています。今では、「山伏」という表記が一般的ですが、「山臥」とも書いていました。まさにその言葉の通り、山を住みかとして寝起きし、山を教室として学びます。われわれは山という大自然の中に分け入って心身を鍛練するのです。

修験とは「修行得験【ルビ：しゅぎょうとっけん】あるいは「実修実験【ルビ：じっしゅうじっけん】」の略語です。実際に自分の「身体」を使って修め、行じていく。つまり、自分の身体にありありと「験【ルビ：しる】し」をつかんでいく。それが山伏の修行です。山谷【ルビ：さんや】を跋涉【ルビ：ぼつ

しょう】(歩きまわること)し、自らの身心を使って限界まで修行する。私たちはそれによってさまざまな靈氣や験しを得ていきます。

山を歩く。礼拝する。滝に打たれる。坐禅をする。これらはぜんぶ山伏の修行です。そしてぜんぶ、身体を使った実践修行です。このように、私たちは理屈ではなく、自分の五体を通して実際の感覚を体得するということを繰り返し、それによって悟りを目指していきます。極めて実践的な宗教、それが修験道です。そして、大自然の聖なる力、超自然的な神仏の力(験力【ルビ:げんりき】)を修めた者という意味で「修験者【ルビ:しゅげんじゃ】」とも呼ばれるわけです。

また、実践的な修行は、山の中だけではありません。山で験力を獲得した修験者は、里に降りて、護摩【ルビ:ごま】を焚き、雨乞いや病氣平癒の加持祈禱などをはじめ、衆生の願いに応じてさまざまな活動を展開します。山の行より里の行、衆生のもとでの活動もまた、山伏の大切な修行実践なのです。

・修験道の定義③神仏和合の宗教

三つめに、修験道とは「神仏和合の宗教」であるということが挙げられます。

仏教を父に神道を母に、いわば仏教と神道という夫婦の間に生まれた子どものようなものが修験道です。

修験道は、もともとは自然や山岳を畏れ敬うといった信仰風土に、仏教的行法が入って成立したものです。さらには、中国の道教や陰陽道【ルビ:おんみょうどう】などさまざまな要素も吸収され、やがて庶民のあいだでひろく行なわれた加持祈禱などが加わっていきました。

国土の七割を山が占める日本では、古くから山を神靈の宿る聖地として大切にしてきました。もっとも古い神社として知られる大和の三輪【ルビ:みわ】神社には本殿がありません。というのも、三輪山【ルビ:みわやま】そのものがご神体だからです。境内にあるのは拝殿です。春日大社のある春日山も聖なる山として、伐採が厳しく戒められ、そのために原始林の姿を今に伝えることができました。

また古来より日本人は、山だけではなく岩や樹木も「神の依【ルビ:よ】り代【ルビ:しろ】」として崇めてきました。

神道には八百万【ルビ:やおよろず】の神々があるといわれます。太陽神である天照大神をはじめ、火の神、水の神、台所から厠【ルビ:かわや】(トイレです)まで、いたるところに神さまがいると考えてきました。

身の回りのどこにでも神さまがおられて、私たちは見守られている。つねに神さまに見られているのだから、「神さま、ご先祖さまに恥じることのない生き方をしよう」というのが、人々の生活規範になっていたのです。

そういった神道の国に六世紀頃、仏教が伝来しました。日本には、もともと「八百万の神々がおわす」というおおらかな宗教観がありましたから、仏さまは、いわば新しい神さまとして受け入れられたのです。仏のことを「蕃神【ルビ:あだしくにのかみ】」「今来【ルビ:いまき】の神」と呼んだことから、

それがうかがえます。仏であっても、外国から来た新しい神として受け入れたわけでは

こうして、わが国は新しい神様である「仏さま」を排除することなく、神も仏も、ともに礼拝していくことになりました。そして、「神仏習合」「神仏和合」という考え方を編み出しました。これは、根っこのところで、神と仏は一体だという考え方です。やがて、

「仏が日本の神としてあらわれた」

「日本の神の本地は仏である」

「神は仏の化身である」

「仏が衆生に応じて神としてあらわれた」

という考え方になっていきました。これが修験道の本尊であり、根幹をなす「権現【ルビ：ごんげん】」というとらえ方です。

・修験道の定義④優婆塞のための教え

修験道の大きな特徴として、四つめに「優婆塞のための教え」をあげておきたいと思います。優婆塞とは在家の修行者のことです。

仏教では出家の修行者を比丘（男性）比丘尼（女性）をいい、それに対して在家の修行者を優婆塞（男性）優婆夷（女性）と呼びますが、修験道は在家主義を本義としています。もちろん私のように僧衣を身につけ、僧職として修験道に関わる者もたくさんいますが、修験道の教え自体が在家出家を問いません。

修験道を開かれたとされる役行者自身が、生涯出家はされず、在家のまま通されたことから、通称、役行者を「役行者優婆塞」とも称されます。役行者をたたえる御真言は「おんぎやくぎやくえんのうばそくあらんきやそわか」とお唱えしますが、役行者以来、修験は優婆塞信仰、庶民信仰を大切にしてきました。大伽藍の奥におさまるのではなく、常に社会に出て、俗世の中で活動するのが修験の特徴なのです。

優婆塞優婆夷のための宗教であり、優婆塞優婆夷自身が担い手の宗教なのです。

理論や教義に縛られることなく、猥雑ともいえる日々の生活の中で、庶民の宗教心に寄り添い続けた宗教といえるでしょう。

●修験道はもともと日本的な宗教

修験道は神仏を分けず、神も仏もともに尊いものとして礼拝してきました。修験道のみならず、古来から日本人の信仰は、神も仏もともに礼拝するものでした。それが、日本の宗教の原点といってよいと思います。そして、神仏への礼拝以前にあった、日本ならではの山岳信仰がそのベースだと言えるでしょう。

古来、山の民は、動物や木の主である山の神が山中に存在すると信じていました。山の民だけではありません。里の水田耕作民も、山の神は農耕を守る水分神、のちには祖神であるとして、ふもとに祠【ルビ：ほこら】をつくってあがめました。

そのうち、山にこもって修行する者たちが現れます。代表的な修行者が飛鳥時代に活躍する役小角【ルビ：えんのおづぬ】です。後で詳しく述べます。また、とくに最澄・空海の時代より盛んになった密教とも結びつくことで、山岳修行によって験力を修めて加持祈祷の力をもった者が修験者と呼ばれた、という言い方もできると思います。

修験者たちは、身近に見える山を神仏や祖霊がおわす世界であると考え、畏れをもって仰ぎ見てきました。山には聖なるものがおられ、その聖なるものを仰ぎ見、そこに入って大自然と同化し、山の靈氣をいただいて修行してきたのです。そして、山の民・里の民も、山を神がいる聖なるものととらえていたので、そのうち、修験者に導かれる靈山詣（ありがたい靈力のある山にお参りにいく習慣）が盛んになりました。

この日本人の山に対する感覚は、欧米の文化と比較してみると、特徴がより際立ちます。欧米人には、山を仰ぎ見るような信仰はありませんでした。たとえば、トーマス・マンの小説『魔の山』、あるいは『ロード・オブ・ザ・リング』や『ハリー・ポッター』などの映画を見てもわかるように、欧米では、森や山は悪魔が住み着くところとみなされています。欧米人の彼らが進んで山に入るようになるのは、わずか二百年ほど前のことです。自然科学の発達により、山にいるのは悪魔ではなく岩や氷の固まりであるとわかってきて、そこからようやく西洋の登山の歴史は始まります。日本人はあまり知らないのですが、西洋登山は極めて新しいものなのです。

欧米の宗教（ユダヤ教・キリスト教・イスラム教など）文化圏の自然に対する考え方は、八百万の神の文化のある日本とは大きく異なります。キリスト教などでいうところの「神」は自然の中にはおりません。神は自然を創造しましたが、自然と同化してはいません。神はつねに自然の外にいる「絶対者」です。

その絶対の神と契約した人間にとって、自然というものは、神から与えられたものなのです。神との契約によって、自然をどのように切りとってよい、意のままに扱ってよい、という論理の下に発達してきました。これがキリスト教精神を基層とした欧米の文化の考え方です。欧米の森のほとんどは一度切り取ったあと、新しく植えた森、悪魔を追放して住みとった森なのです。

日本人にとっての森は、そのままが聖なる存在です。日本人にとっての自然観なのです。その目線の中で、森は神仏のおわす場所として本来の姿を活かしながら大事に守られてきたのです。

聖なるものがおわす森の世界に入るということは、聖なるものに触れることであり、聖なるものからエネルギーをいただくという考えがあります。こうした宗教意識の基層の部分に深くかかわってきたのが修験道です。

こうした日本の古き山岳信仰に、神道や外国から入ってきた仏教、道教、陰陽道などが習合して成立したのが修験道であり、山伏の宗教です。

ですから、修験道は日本人の感覚に根ざした、もともと日本らしい宗教とも言えるのです。